

【公開シンポジウム】
あらためて“いのち”について京都で考える
東日本大震災を縁として

テーマ 心のざわめきを見つめて

趣旨

東日本大震災から5年が経ったいま、あらためていのちについて考える事を目的とします。

この震災は、多くのいのちを奪い、沢山の人の生き方に影響を与えました。振り返ってみれば、これまで、社会に発信されてきた情報と、現地の生の声との間には、差異があり続けてきたように思います。ともに前へとのスローガンに反して、亡くした人を置き去りにしたような罪悪感にかられる人。復興を喜ぶ反面、変化する街並に戸惑う人。いくら月日が経とうとも、いくら建物が再建されようとも、癒えない心は存在し続けているのです。震災を通して、私たちは心の機微に多く触れる経験をしました。そして、これまで生活のなかで見過ごしてきたような気持ちに、とても敏感になりました。メディアにおいて、「頑張れ」という言葉があまり使われなくなりました。それはこの語に対する「もう頑張れない」「充分やっているのに」といった気持ちが露わになったことの影響といえるでしょう。（※本シンポジウムを通して、この現象の善し悪しも見えてくるでしょう。）ここでは、そうした心の機微を「ざわめき」と名付けます。

このざわめきは、決して震災についてだけではありません。日常のなかにも、言いようのない気持ちがざわめいてはいないでしょうか。自分自身はもちろん、周囲の人たちのざわめきに気付くことは、心を大切にすることにつながります。ざわめきから目を逸らす社会よりも、ざわめきに光をあてるような社会は、より心豊かな、いのちを大切にしようとする社会なのだと思うのです。

いま一度立ち止まって「ざわめき」に光を当ててみませんか？

日時

2016年3月23日(水) 13時～16時15分

場所

聞法会館3F多目的ホール
京都市下京区堀川通花屋町上ル柿本町
(西本願寺の北側)

各部のテーマ及び発題者

- 第1部 **自分自身への「ざわめき」を見つめる～自らの救いとしての宗教**
 - ・寺戸淳子（宗教学者・専修大学兼任講師）－対人支援に関わる経験から
 - ・鈴木英生（記者・毎日新聞社）－震災を報道してきた経験から
 - ・安部智海（宗教者・総合研究所研究助手）－被災地支援に関わる経験から
- 第2部 **周囲の人びとへの「ざわめき」を見つめる～他者を救う営みとしての宗教**
 - ・鈴木岩弓（宗教学者・東北大学教授）－信仰に触れてきた経験から
 - ・加藤智也（作業療法士・健康科学大学学科長）－対人支援に関わる経験から
 - ・金沢 豊（宗教者・総合研究所研究員）－被災地支援に関わる経験から
- 全体
 - ・コーディネーター：竹本了悟（宗教者・総合研究所研究員）
 - ・コメントーター：磯前順一（宗教学者・国際日本文化研究センター研究部教授）

日程

12:30	開場	
13:00	開会挨拶	藤丸智雄（浄土真宗本願寺派総合研究所副所長）
13:05～14:30	第1部	20分発題×3名・25分コメントーターを交え質疑応答
	休憩	
14:45～16:10	第2部	20分発題×3名・25分コメントーターを交え質疑応答
16:15	閉会挨拶	丘山願海（浄土真宗本願寺派総合研究所長）
	閉会	

対象

一般(無料・申込不要)

定員

150名

問い合わせ先

浄土真宗本願寺派総合研究所

〒600-8349 京都市下京区堺町 92 TEL: 075-371-9244